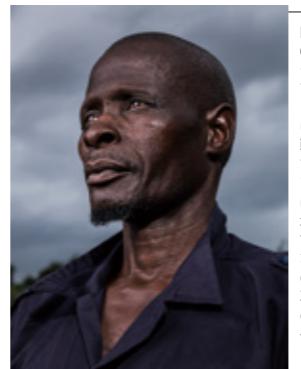




Brent Stirton/Getty Images/ICRC モザンビーク北部 テテ
地雷除去専門組織ヘイロ・トラストの一員であるピーター・ペレス（28歳）。カオラバッサ水力ダム近くのシンシンガ丘で地雷を除去している。農民だった彼の祖父は、この地域で地雷の犠牲になってしまった。ペレスと彼のチームはこの日15個の地雷を除去。ヘイロ・トラストはモザンビーク北部全域の地雷を除去した



Brent Stirton/Getty Images/ICRC モザンビーク中部 コンドラ地区
タンザニアに本拠を置く社会企業のAPOPOは、対人地雷を探知する製品開発を専門とする。するどい嗅覚をもつアフリカン袋ネズミが地雷をかぎ分けられるよう訓練している。発見された地雷は、その場で爆破処理される。ネズミを使うことで地雷除去が劇的な速さで進んでいる



Brent Stirton/
Getty Images/ICRC
モザンビーク首都
マプト
1982年から1994年にかけてモザンビーク解放戦線の兵士だったアルマンド・マニユエル・アブロ・クアンバ（50歳）は、内戦のあいだ対人地雷を埋めた。多くの市民が地雷の犠牲になっているため、自分の行いを悔いている。次世代のためにも全ての地雷が取り除かれるべきだと信じている



Brent Stirton/Getty Images/ICRC モザンビーク中部 バリオ・シウイホ
ボナファシオ・ムアジア（57歳）は、内戦が続いている1987年に対人地雷によって左脚を失った。しかし、驚異的なバランス感覚を身に着け、今も農業に専念している。鍼を妻が持ち、毎日片足45分かけて自分の農場まで脚を引きずって歩く



Sebastian Liste/Getty Images/ICRC ニカラグア首都 マナグア
ジョージ・ピーター・ペラルタ（47歳）がホンジュラスの国境付近で任務についていたとき、対人地雷を爆発。右脚の膝から下を失った。その後、彼はマナグアにあるアルド・チャバリア・リハビリテーション病院の警備員として雇われ、働き続けている。ここは、ICRCの障がい者のための社会基金によって運営されている



Sebastian Liste/Getty Images/ICRC ニカラグア北西部 モンテ
1991年、牛の世話をしているとき対人地雷を踏みつけ、右脚を失ったエミリオ・ホセ・ゴメス・フロリアノ（42歳）。現在は、自営の製陶業を手伝っている



Sebastian Liste/
Getty Images/ICRC
ニカラグア首都 マナグア
ベニート・リバス・ビジャ
ロボス（49歳）は、1989年、農作業中に対人地雷を踏みつけ、左脚を失った。現在、妻と人の子どもと一緒に北西部のソモティリョに住み、農業を続けている。5年間同じ義足をつけていたので、新しいものに変えるために、マナグアのアルド・チャバリア・リハビリテーション病院にやって来た



Sebastian Liste/Getty Images/ICRC ニカラグア首都 マナグア
カルロス・ホセ・ピカド（52歳）は、1981年から1990年まで統いたニカラグア内戦に参加し、対人地雷を踏みつけ右脚を失った。現在はマナグア郊外に妻や娘と暮らし、病院の警備員をしながら生計を立てている



Sebastian Liste/
Getty Images/ICRC
ニカラグア北西部 ハラバ
ジエロニモ・デュアルテ・
アマドール（61歳）は、ホンジュラスの国境付近エル・コヨリトで軍の任務中に対人地雷で右脚を失った。事故の後、靴の販売を学んだが、仕事が見つからず、コーヒー農園に着手。しかし、土地を耕す前に地雷を除去する必要があった

Sebastian Liste/Getty Images/ICRC ニカラグア北西部 ハラバ
マイコル・エルモジエネス・モリナ（53歳）はコーヒー農園での作業中に地雷で左脚を失った。今でもコーヒー農家として娘2人と息子1人と一緒に暮らしている



Brent Stirton/Getty Images/ICRC

国際人道法写真展 戦場を希望の大地へ

地雷や不発弾など、紛争による被害を受けながらも、社会復帰に向けて力強く生きる人々の記録。

対人地雷とは

人間を負傷させる目的でつくられた兵器で、触れたり踏んだりして圧力をかけることで爆発します。紛争時、草の陰に置かれたまま地雷に埋められた対人地雷は、紛争が終わっても残されたままになっています。兵士と民間人を区別せず一般市民に危害を加えるため、「悪魔の兵器」とよばれます。

クラスター弾とは

一つの爆弾の中に数十、数百もの大量の子爆弾を詰めて、上空で爆発させることで子爆弾が広範囲にばらまかれます。

戦車や建物などの堅いものにあたると爆発しますが、沼地や畑などのやわらかい地面に落ちると爆発せずに残ってしまうことがあります。

残された子爆弾は、紛争が終わっても一般市民に脅威をもたらします。

戦争、内戦などの犠牲者に対して人道支援を行う赤十字国際委員会、災害や保健・衛生において世界レベルでの人道的活動をとりまとめを行う国際赤十字・赤新月社連盟、そして、各国内において災害や医療・保健、社会福祉、青少年育成などの事業を展開する各国赤十字・赤新月社は、「生命と健康を守り、人間の尊厳を確保する」という目的のため、あらゆる状況下で人間の苦痛を予防・軽減することに努めています。これら全ての活動は、「国際赤十字・赤新月運動」として世界中で展開され、多くのボランティアと共に、「人道」の実現を目指しています。

赤十字は、「戦場で傷ついた人々を敵・味方の区別なく救いたい」という一人の人物の願いから生まれました。1859年、スイス人のアンリー・デュナンは、イタリア統一戦争で負傷した兵士たちが治療を施されないまま野放しにされている状況に衝撃を受け、2つの提案をしました。

「紛争時に負傷者を救うため、平時から各国に救護団体を組織すること」「救護団体が紛争時に活動するための国際的な取り決めを定めること」

1つ目の提案によって、各国に赤十字社（イスラム圏では赤新月社）が誕生しました。

2つ目の提案によって、ジュネーブ条約が生まれ、国際人道法へと発展しました。

国際人道法とは、紛争による不必要的犠牲を防ぎ、戦闘に参加しない一般市民を保護することを目的に定められた国際的な「戦時のルール」です。

そのため、世界各地で紛争が終った後も、対人地雷やクラスター弾などの爆発性戦争残存物（以下、不発弾と呼ぶ）によって一般市民が傷つけられている現状を赤十字は見過ごすことが出来ません。

対人地雷やクラスター弾などの不発弾により被害を受けた人びとは、命の危機にさらされるだけでなく、その後の生活や社会復帰への大きな障害を抱えています。

こうした紛争の負の遺産やそれによって人生を変えられた人たちを記録するため、赤十字国際委員会（ICRC）は世界的に活躍する5名の写真家を5カ国に派遣しました。被害を受けながらも、社会復帰に向けて力強く生きる人々の姿をご覧ください。

写真家

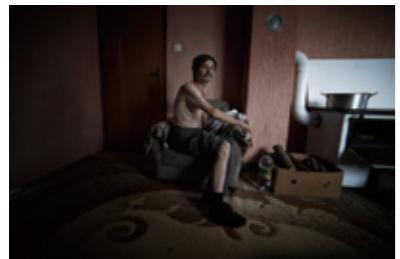
Brent Stirton / ブレント・スタートン

Marco Di Lauro / マルコ・ディ・ラウロ

Paula Bronstein / ポーラ・ブロンステイン

Sebastian Liste / セバスチャン・リスト

Veronique de Viguierie / ヴェロニカ・ドゥ・ヴィゲリー



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ北部 ドボイ
2011年。妻と果物の収穫中に対人地雷を踏んだサリー・ハサンミジク(56歳)。妻は命を落とし、彼は脚と背中に傷を負った。サリーの兄弟のうち、エセフは2006年に地雷の事故で亡くなり、ミレットは1997年に2度の地雷の事故から生き残ったものの、両手脚を失った



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ中部 ゾブニカ
2013年11月。デニス(12歳)、アレン(14歳)、ジャスミン(12歳)、ミリザ(10歳)と遊んでいた4人は、川でかばん一杯に詰められた兵器を見ついた。ライフル・手榴弾の安全装置を解除し壁に投げつけたミルザは、命を落とし、残った少年も負傷。爆発性戦争残存物は、ボスニア・ヘルツェゴビナのように紛争が終結した国でも今もなお、人々の脅威となって残っている



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ中部 ゾブニカ
2013年11月。デニスのいとこであるミルザ(10歳)と娘のメリマ(10歳)が、メリマの兄エルダーの墓の側で涙を流している。兄妹が川岸で一緒に遊んでいたところ、エルダーが手榴弾を発見。握った瞬間に爆発し、エルダーは命を落とし、メリマは負傷した。ゾブニカは昔の兵営に近く、このような事故が後を絶たない



Marco Di Lauro/Getty Images/ICRC
イラク北部 アルビル
マセリエ・サハ(13歳、左)と姉のサエダ(16歳)は対人地雷で左脚を失った。後ろに座る母親のサポートを受け、姉妹はアルビルにあるICRCの身体リハビリテーション・センターで、新しい義足を装着して歩行訓練を受けている



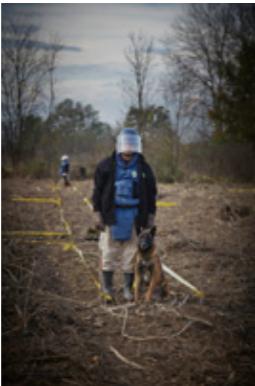
Marco Di Lauro/Getty Images/ICRC
イラク北部 ベワルデ
地雷諮詢グループから、地雷の危険性を学ぶ学生。地雷や爆発性戦争残存物による負傷者は5万人に上る



Paula Bronstein/
Getty Images/ICRC
ラオス中部 サラワン地区
オーンラー(61歳)は、1981年に農作業中に拾った不発弾により視力と左手を失った



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ中部 ゾブニカ
実際に写る2つの兵器は、125mmの高爆発性榴弾と122mmの砲弾で、爆発性戦争残存物としては一般的だ。砲弾の銅帯は金属くず収集者の手で取り去られている



Veronique de Viguerie/
Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ北部
ドマルジエバク・シャマツ
ノルウェー・ビーブルズ・エイドという人道支援団体に所属する地雷除去兵が、グレブナイス市で犬を使って地雷を除去している。犬が地雷の在り処を嗅ぎ分けるので、除去率は著しく増加した



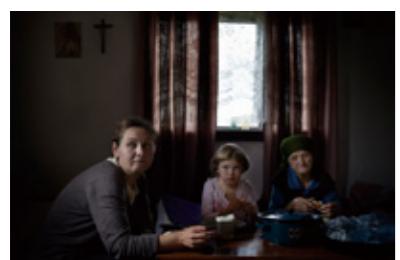
Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ北部 ドマルジエバク・シャマツ
薪の木を切るケイト(右)とロウロ・ゼビク。グレブナイス村のこの辺りは、地雷や爆発性戦争残存物が未だに埋まっている可能性が高い



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス中部 バクサン地区
自転車で自宅に持ち帰ろうとしていた不発弾が爆発し、3人の少年が命を落とした。そのうちの一人であるソマック・トー(12歳)の写真を持つメック(9歳)。1963年から1972年のベトナム戦争中、2億7000万個以上のクラスター弾がラオスに投下された



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス中部 トームラン地区
妻のアリーと写るボーンラ(54歳)。1989年、クラスター弾によって脚を失った。義足は手作りで使い古されており、一度も修理したことがない



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ中部 ドゥブレブ
(左から順に)ルジカ、ドゥジモビク(25歳)、娘のヴァネッサ、(7歳)母のアナ(81歳)。かつては難民だったが、ノルウェー・ビーブルズ・エイドとボスニア・ヘルツェゴビナ地雷対策センターが農地の地雷除去を行ったため、村に戻った



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ中部 ゾブニカ
羊飼いは、羊の群れを連れて地雷や爆発性戦争残存物が埋め尽くされている森を通り抜ける。このリスクを冒さなければ、生計を立てることができない



Marco Di Lauro/
Getty Images/ICRC
イラク東部 ティーノック
ウィッサム・アリ(33歳)は羊の世話をしている最中に、対人地雷に触れてしまった。爆発で右手と右脚を失い、視覚も奪われた



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス東部 ノーン地区
2012年1月、複数の家族が火を囲んでいたとき、埋められていたBLU-26クラスター弾が爆発。4人が命を落とし、アイヨック(10歳)は右脚を失った



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス中部 シエポン地区
不発弾の撤去作業中に見つかったBLU-24クラスター弾。1973年以降、ラオスでクラスター弾により手足を失ったり重傷を負った人は約2万人に上る



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス中部 サラバン地区
地雷の除去作業を始める前に、作業方法について説明するノルウェー・ビーブルズ・エイドのリーダー。クラスター弾に関する条約は2008年に採択され、ラオスを含む世界半数以上の国が批准している



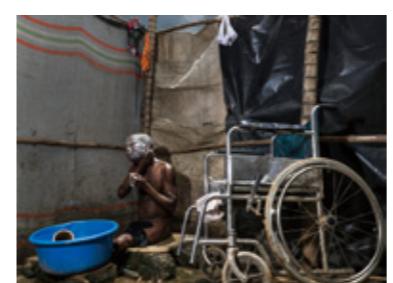
Marco Di Lauro/
Getty Images/ICRC
イラク北部 アルビル
1996年にアルビルに設立されたICRCの身体リハビリテーション・センターにある女性用トレーニングルームに並んだ義足。1993年から障がいを負った人々のリハビリテーションを支援している



Marco Di Lauro/
Getty Images/ICRC
イラク中南部 ナジャフ
マウリアン6万8000平方キロメートルあるジマリシェキヒ地雷原。イラク・クルド地雷除去センターの除去兵が、1984年に埋められた地雷を除去している



Marco Di Lauro/Getty Images/ICRC
イラク北部 アルビル
1991年にイランとの国境付近で右脚を失ったシリワン・アリ・アーメッド(46歳)。戦闘から逃れる途中で対人地雷を踏んでしまった。アルビルにあるICRCの身体リハビリテーション・センターで、義足の型をつくるためにサイズを測っている



Brent Stirton/Getty Images/ICRC
モザンビーク首都 マプト
ホセ・サボネット(54歳)は戦争中に破片式地雷で両脚を失った。5人の子どもを抱え、政府から月100ドルの年金を受け取る



Brent Stirton/Getty Images/ICRC
モザンビーク北部 テテ
2008年に股関節から下を失ったイヴニア・バイノッセ・チジム(66歳)。泥道を歩いて水を汲みに行く途中、水たまりをよけようとしたところ、地雷を踏んでしまった。誰からも支援を受けていない



Brent Stirton/
Getty Images/ICRC
モザンビーク中部
パリオ・シウイホ
リキナ・ジモ・カリシェ(65歳)は、1987年に対人地雷で右脚を失った。その3年前には、同じく対人地雷で夫が命を落としている。非常に貧しく、11人のうち9人の子どもが病気や感染症で亡くなった